

アメリカ・カリフォルニア州南部、ロサンゼルスから東に車で1時間ほどのモンロビアという町で生まれた。4万人ぐらいいない小さな町は、乾燥地域にありながら小さな川が流れており約130年前に人が住むようになった。ほどなくして、僕の先祖も北西部のミネソタからこの暖かい町に移り住んだ。

祖父は上下水道関係のシビルエンジニア。北部のコロラド川からカリフォルニア南部までの運河、アクアダクトの仕事もしていた。父は消防士。山火事が起こると消火活動で3～4日いなくなる。真っ黒になって帰って来てはシャワーを浴び、また出かけて行った。だから、水の大切さは小さい頃からよく知っている。

その頃のモンロビアの宅地は畑も作れる広さで分譲されていた。そして「道路沿いには何かしらの木を植える」という決まりがあった。今ではポプラアベニューやマグノリアアベニューなどの、植えられた木の種類が通りの名前と

なっている。昔の航空写真と比べると、乾燥地帯にありながらジャングルのような緑豊かな町となった。

モンロビアの町のシンボルになっているのが、母校モンロビア・ハイスクールの建物。1930年代の真っ白な二階建てで、前は芝生、後ろは山。大きなベルタワーの音は授業開始の合図。古い造りのまま残る学校で、映画の撮影にもよく使われる。

カリフォルニアで歴史的建造物があるのは、港のあるサンフランシスコくらいだ。サンフランシスコは捕鯨で栄え、ゴールドラッシュで発展した。しかしアメリカ横断鉄道が開通して港は衰退し、太平洋戦争以前は田舎町だったロサンゼルスがアメリカ第二の都市となった。

文化人類学的に考えれば、アメリカ人の遺伝子は他国とどこか違う。僕の先祖もドイツ、チェコ、ノルウェー、スウェーデン、イギリス、スコットランド、アイルランドの7カ国になる。より豊かな生活を求めて、次男坊や三男坊が海を渡

って来た。そしてアメリカで土地を買って開拓。一通り開拓が終わると、そこを売ってさらに西に行き、別の土地を買ってまた開拓した。僕の先祖もそうだったが、このパイオニア・スピリッツはアメリカ人の原点。この柔軟性がアメリカ経済のダイナミックさに繋がっている。

「転がる石に苔つかず」という諺がある。イギリス人に言わせると「いつも動いているものには苔が付かないからダメ」という意味になるが、アメリカ人にとっては「苔が付くと汚くなるから転がる石の方が良い」となる。転職も多く、いつも違うことにチャレンジする。同じ英語の諺なのに、イギリス人とアメリカ人の文化では解釈が異なる。だから、アメリカ人はよく移動する。「引越魔」と言われ、僕も既に12～13回引越している。

映画や音楽に多く登場したRoute 66は、シカゴと西海岸のサンタモニカを結んでいた大陸横断道路で、アメリカ南西部の発展に貢献した。その後、USハイウェイシステム

と言うものがアイゼンハワー大統領の時代に造られた。これらの州間高速道路がアメリカが世界一の経済大国になっていった要因の一つだ。第二次世界大戦中に司令官だったアイゼンハワーは、悪路で途切れたりする道路やゲージ(軌道幅)が統一されていない鉄道などに苦労しながら、アメリカを横断して物資等を運搬した。だから、大統領になった時に道路整備に着手した。今では素晴らしい州間高速道路によって、アメリカをスムーズに移動出来るようになった。

Route 66はちょっと古い。走るのほっくりでも趣がある。時間が大切だったら州間高速道路。景色を楽しみたいければ、この古いハイウェイを使うと良い。古い町並みやいろいろな農地が見られ、商店街みたいなどころがあったりして、結構面白い。

モンロビア・ハイスクールの建物(写真:ダニエル・カール)

特集  
土木遺産Ⅺ

MESSAGE

A rolling stone gathers no moss  
(転がる石に苔つかず)



ダニエル・カール  
Daniel Kahl

プロフィール

1960年、米国カリフォルニア州モンロビア市生まれ。モンロビア高校時代、交換留学生として奈良県智弁学園に1年間滞在。パシフィック大学在学中に大阪の関西外国語大学に4ヶ月間学び、その後、京都二尊院に2ヶ月間ホームステイ、佐渡島で4ヶ月間文弥人形つかいの弟子入りをした。卒業後日本に戻り、文部省(当時)英語指導主事助手として山形県に赴任し、3年間英語教育に従事。その後、上京し、セールスマンを経て、通訳・翻訳会社を設立。20年前からテレビ・ラジオ等の仕事を兼務して現在に至る。妻と息子の3人家族。好奇心旺盛な性格とバイタリティあふれる行動力、そしてユーモア豊かなサービス精神、英語やドイツ語に加え3年間の山形での生活で鍛えた山形弁を武器に、ドラマ、司会、コメンテーターなど、何でもこなすマルチタレントで、山形弁研究家。